

背景

01

近年、空間を仕切る方法として壁を用いて分節するのではなく、空間の屈折を用いて空間をゆるやかに連続させる事例が見られる。空間の屈折を用いることで、その可視・不可視の関係や奥行きの深さ・浅さといった視覚的变化を伴い人間の知覚するスケールから建築を作ることが可能である。

そのためには、実際の距離の大小によって生成される奥行きだけでなく先の空間への期待感のような感覚的な奥行き感も同時に考慮する必要がある。

目的

02

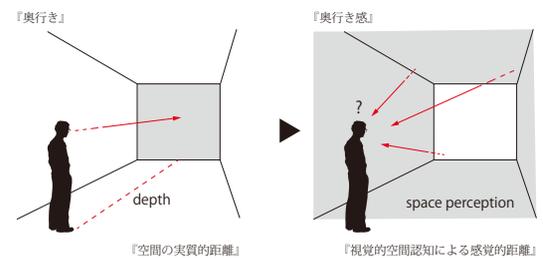
『屈折』を壁の折れ曲がりによる平面形態の折れだけでなく屋根の折れを含めた立体的な空間の折れとし、『奥行き感』を生成する空間の設計手法の提案を目的とする。



定義

03

『奥行き』が実質的距離であるのに対し、『奥行き感』は実際の距離によらない視覚的空間認知による感覚的距離感と定義する。

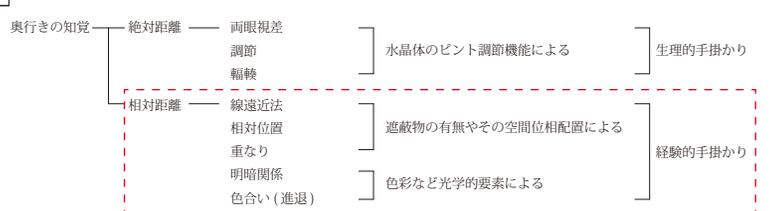


視覚論

04

ここでは、視覚に着目し、その人体のメカニズムと人が空間を知覚する手立てを明らかにします。

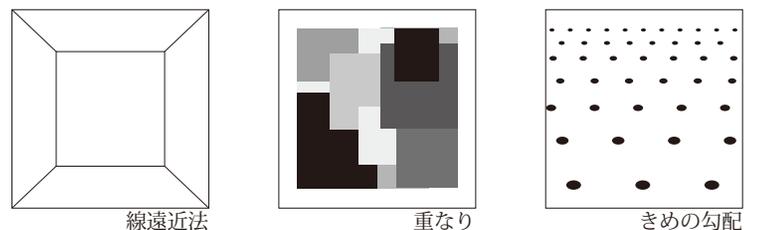
文献調査によると、人が空間を知覚する手立てとして『生理的手掛かり』と『経験的手掛かり』の2種があり、ここでは経験的手掛かりを奥行き知覚の手立てとして展開する。



視覚と奥行き

05

J.J. ギブソンの視覚論のなかでも経験的手掛かりと空間の相関関係から線遠近法、重なり、きめの勾配を奥行きを知覚させる要素として抽出し、奥行きを知覚する空間の基本概念として考察を行った。



本敷地は、明治通りの東側に面し、用途地域は西側の一部が商業地域で東側の大半が第二種低層住居地域に指定されている。

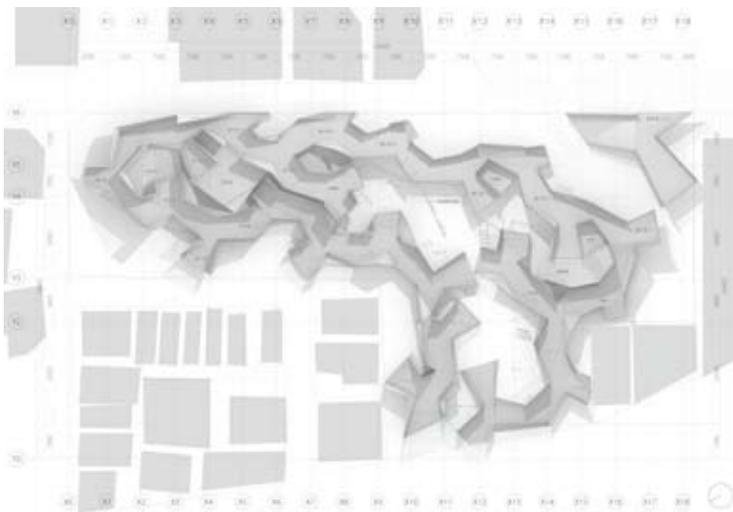
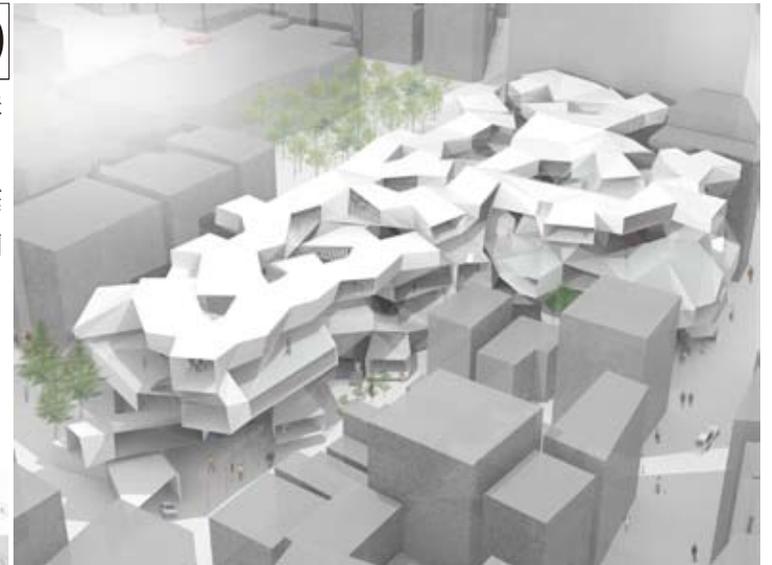
宮下町アパートは、1961～1965年に建設された3つのアパートのうち1、2号棟は昨年解体。現在は3号棟のみ残っており、この建物の低層部に11の借地権者が店舗を携えている。



ヴォリューム

アクセス、地形的高低差、地区計画等法規による制約を加味しながら全体を決定する。

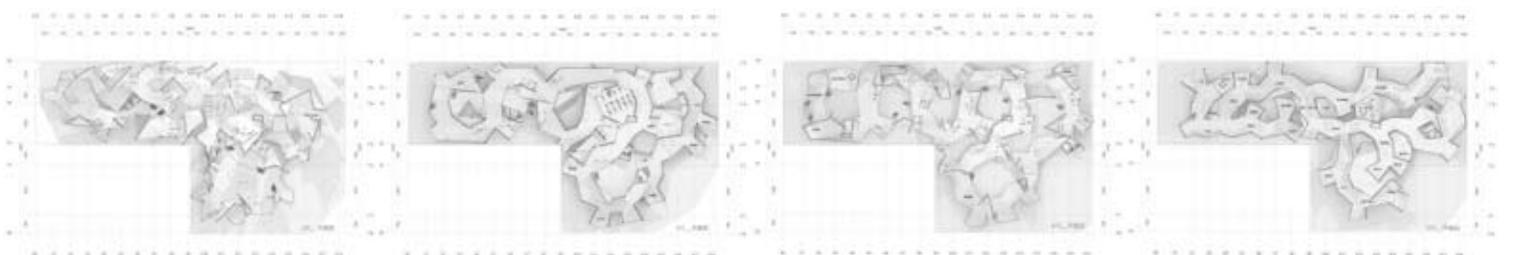
各階ヴォリュームは三叉クラスタの連続が3層とそれら繋ぐ積層の空間で全体が構成されており、用途毎に異なった初期値を与え、用途に適応した形態で積層する。

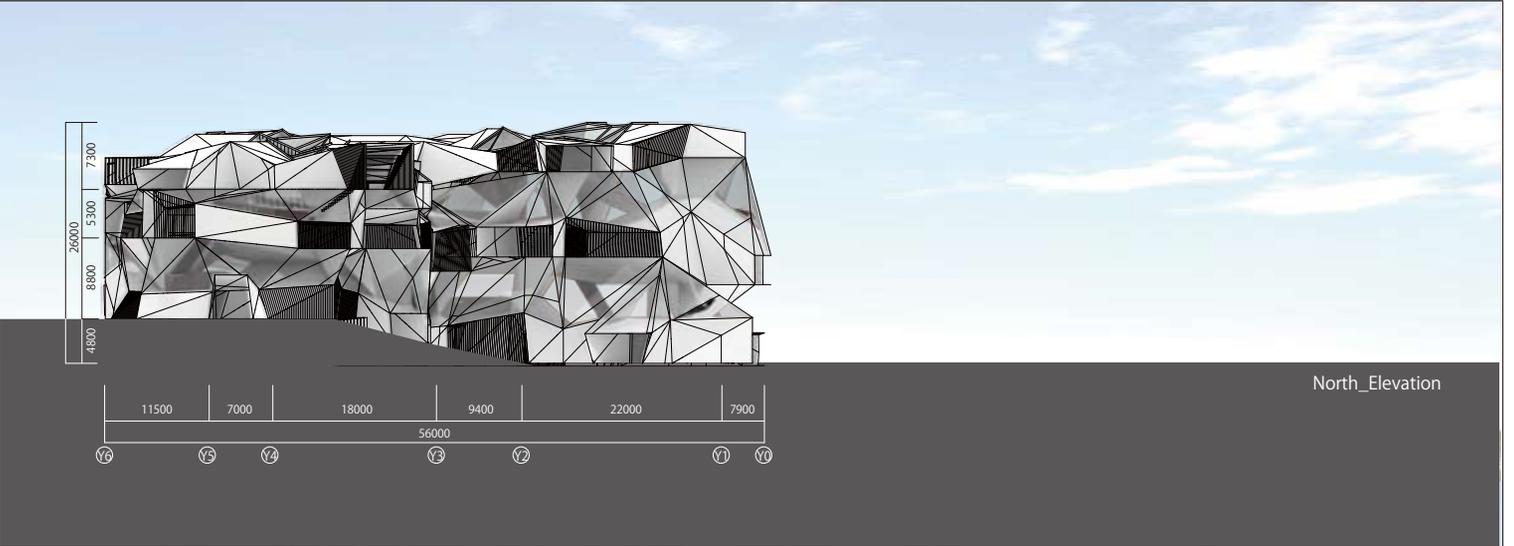
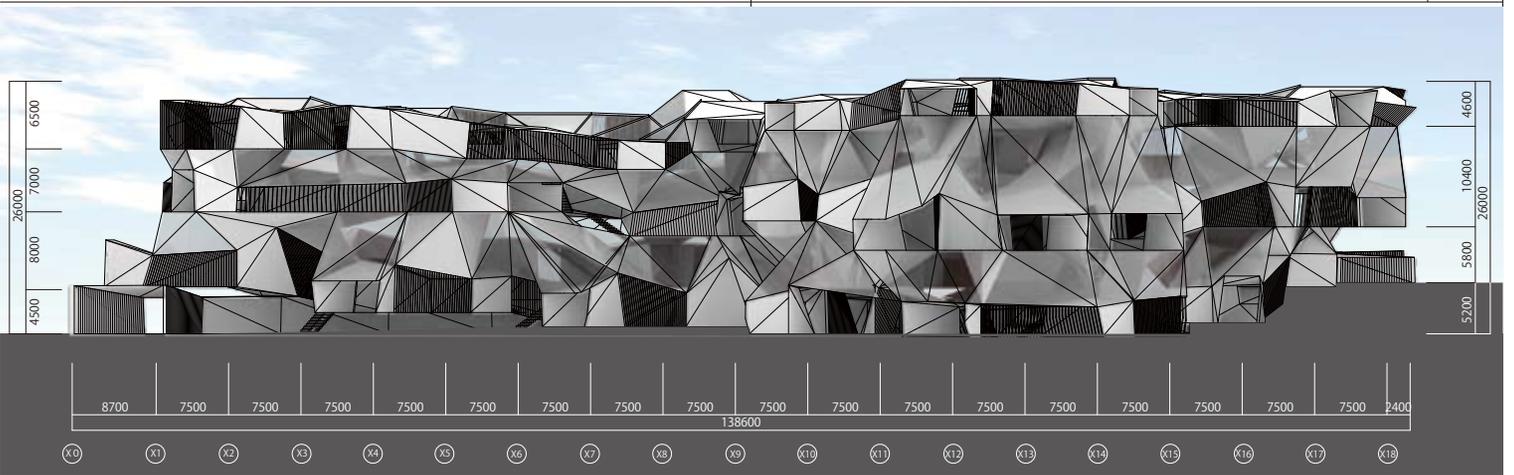
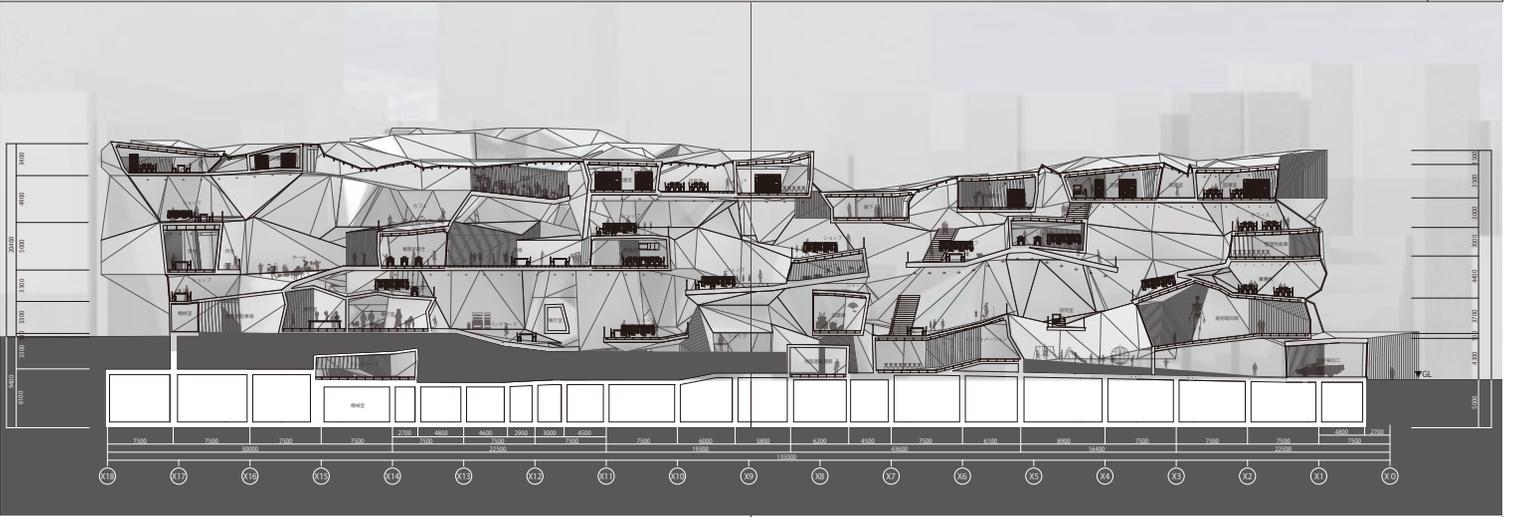


平面計画

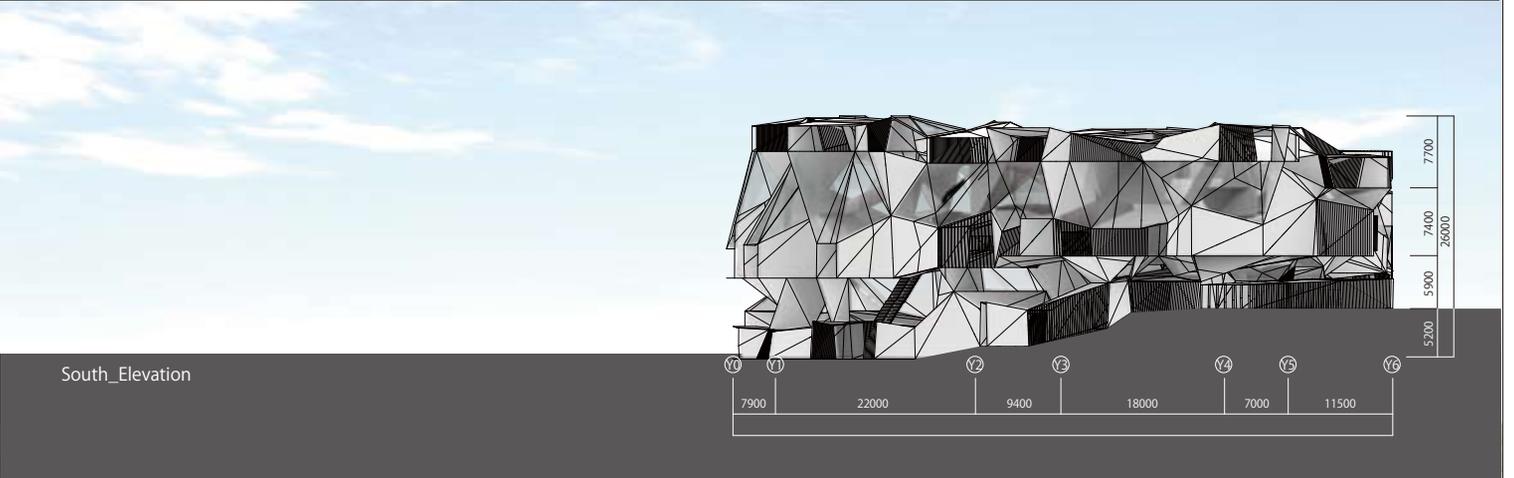
アクセス、地形的高低差、地区計画等法規による制約を加味しながら全体を決定する。

各階ヴォリュームは三叉クラスタの連続が3層とそれら繋ぐ積層の空間で全体が構成されており、用途毎に異なった初期値を与え、用途に適応した形態で積層する。





North Elevation



South Elevation